

イラン ◎汚された大気・地下水・カスピ海

●ボンコツ車が犯人

私がアジ研の派遣員としてイランに滞在した一九六一年頃のテヘランの空はきれいであった。高く澄みきったまっさおな空。シルクロード学者の加藤九祚さんはこの空の色を好まれ、私家版の自著の表紙の色にされたし、私のペルシャ語文法書のカバーの色もそうである。遠くにはテヘラン富士「ダマーヴァンド山」がくっきりみえた。

一九八九年の二月、久しぶりに冬のイランを訪れた。しかし、どことなく町が臭い。ハンカチを口に当てて歩いてる人もいる。バスやタクシーに乗ると、服が汚れる。コートは二週間の滞在で薄黒くなり、日本に帰ってから二度クリーニングに出したが、袖口はどうしてもきれいにならなかった。

かつてのきれいな空は消えてなくなり、もう「テヘラン富士」はみえない。どうしてこうも汚い町になったのであろう。その元凶は車の排気ガスであった。

シャー体制下、七〇年代の高度経済成長期には、イランは自動車の生産台数ではアジア第二位

を誇っていた(七七年には一三万台)。しかし、イランの自動車工場は日本や欧米の自動車の組み立て工場にすぎず、国産化率は低く、外国への依存度がきわめて高かった。一九七九年にイラン革命が起こった。革命のスローガンの一つは、外国からの自立であった。革命後、外国企業が撤退を余儀なくされるとともに、自動車の生産台数は激減した。

その上、一九八〇―八八年まで続いたイラン・イラク戦争による外貨不足と輸入制限政策のため、自動車とスベアパーツの輸入は止まった。供給は大幅に減少し、町にはポンコツ車が氾濫した。フロントガラスにヒビの入っていない車や、当て傷のない車はないといっても過言ではない。五年以内の車なら新車といってもおかしくない。部品不足により整備は悪く、車は真っ黒な噴煙をだして走っている。

車の排気ガスがテヘランの空気を汚す主犯となっている。排ガス規制が実施され、自動車の国内生産が増え、整備された車が走ることに解決の道はない。

工場も犯人である。七〇年代の高度経済成長期の住宅の需要増大に伴い、主要建材である煉瓦の生産が急増、都市近郊に多くの煉瓦工場が作られた。テヘランでは煉瓦工場の多くは南部に集中しており、これもテヘラン下町の大気汚染悪化の一因となっている。また、テヘラン市西部には工場が集中しているが、工場地帯は風上にあり、工場の出す排煙が大気汚染悪化に影響を及ぼしている。

テヘランでは、許容量の二〇倍を越す汚染物質が排出されているといわれ、市民の健康に深刻な影響が及んでいる。

●汚物が家の中に逆流

イランには下水道がない。トイレは水洗式になっていても、浄化槽に流れこむわけではない。家を建てる時に、カナート（地下用水路）掘り職人（モカンニ）が中庭の地下三〜四メートルほどの所に大きな素掘りの肥え溜めを掘り、ここに便も家庭排水も流し込む。素掘りのため水分は地下に浸透し、固形物だけ中に残るが、時々、これを垂直に掘ったたて坑から掘り出す。

テヘランは、私が滞在していた六〇年代初めには人口二〇〇万人の町であり、長い間にわたり人口に大きな変化はなかった。地中に浸透したトイレの汚物と家庭排水は土で浄化され、雪や雨を水源とする地下水と混ざり、テヘランより低地にある南部のレイでカナートの水として利用されてきた。この水をレイの人々は飲み水も含む生活用水と灌漑用水としてきた。

しかし、七〇年代の年率一〇%をこす高度経済成長により、テヘランは急速に拡大し、人口は八〇〇万人を超えた。所得の向上により電気洗濯機が普及し、シャワーの利用も増えた。近代建築の増加により、大量に水を消費する水洗便所が急増した。水の消費は大きく増大し、排水量は人口の増加（四倍）を大幅に上回った。

テヘランにおける下水量の急激な増大はテヘラン下方（つまり、南部）の地域の地下水位を押しあげることになった。これまでは地下水面は一〇メートルはあったが、今は数メートルも掘れば水が出てくる。雨が降れば、一メートル以下になることもある。

イランの乾燥地帯では、一般には草木は自生せず、水かかりのよい所にのみ草木が成育する。

かつてはテヘラン南方のレイの町でも灌漑用水の届く所のみ木や草が生えていた。ここも砂漠の町であった。しかし、一九七六年にこの町を訪れた時には一面に草が生えていた。地下水位が上昇したため草が自生するようになったのである。

この限りでは結構なことであった。しかし、少し多くの雨が降れば、地下水位が上がり、トイレのために掘った穴から汚物が逆流するようになった。そして、家の中は汚物であふれた。この「水害」「糞害」対策として、地下水位を下げるための排水用のカナートが掘られた。あまりにも急激な都市の膨張が地下水の秩序を乱し、公害を生んだのである。

水位上昇による被害のみではない。自然の浄化作用を超える大量の汚水の地下浸透により、地下水の水質がいちじるしく悪化した。これに拍車をかけたのは電気洗濯機である。高度成長によってテヘラン市民の所得が向上し、電気洗濯機の普及が急テンポで進んだ。その結果、合成洗剤で汚染された大量の排水が、何の処理もなされることなく地下に浸透しこれが水質悪化の大きな要因となった。

一九八八年夏、テヘラン市民は汚染野菜の出現にショックを受けた。レイはテヘラン市民の野菜の供給地である。この野菜が農薬で汚染され危険であると厚生省が市民に警告を発したが、汚染された地下水が原因の一つともいわれている。

●キャビアはいつまで？

世界の三大珍味の一つキャビア（チョウザメのタマゴ）はカスピ海産が世界最高といわれる。

しかし、カスピ海のソ連の沿岸では工業用水と汚れた生活排水の流入による水質悪化により、キャビアも安全な食品ではなくなったという。イランのカスピ海沿岸ではまだ水はきれいで、イラン産のキャビアは安全だとイラン人はいつているが、いつまで安全性を保てるであろうか。

現在、イラン側にはカスピ海沿岸地方で工業化の計画はないが、ソ連沿岸では工業化が進んでいる。たとえば、日本・イタリア・アメリカの商社・化学会社・石油会社四社との合弁により、カザフ共和国のカスピ海沿岸のテンギスで大規模な石油化学事業を行うことが計画され、九〇年六月、ソ連と四社の間で基本合意が成立したと、新聞は伝えている（『朝日新聞』一九九〇年六月九日）。

ソ連側では工業化の可能性はきわめて高く、カスピ海の汚染は急速に進み、イランのキャビアも安全な「珍味」ではなくなるであろう。キャビアは金持ちにしか縁のない食べ物であるが、貴重な輸出品でもある。キャビアが危険な食品となり、輸出が減れば、ソ連との関係にも影響がでるであろう。イラン人の間でも魚の消費が増えている。魚の供給地であるカスピ海の汚染が進めば、一般のイラン人にも大きな影響を及ぼすことは必至である。

あるヨーロッパの国の船がPCBほか大量の産業廃棄物を運んできて、黒海のトルコ側に投棄した。そのため黒海、ボスフォラス海峡、マルマラ海は重金属に汚染され、トルコの魚は危険な食品になった。ビールにあうムール貝のフライも、安くておいしいエビも危険覚悟でないともう食べられない。トルコ人は無関心であるが、イスタンブルに住む日本人はじめ外国人は魚を食べなくなつたという。カスピ海の魚もトルコと同じ運命を辿るかもしれない。

イランでは、他の国のように深刻な環境問題ははまだ発生していないが、それはイランが革命後、外国資本の流入を止め、外国からの「汚染」輸入を防げたことと、工業化が停滞したことの結果に他ならない。ラフサンジャーニー新政権のもとで、工業化も進み、外資の流入も予想される。水資源に恵まれたカスピ海沿岸にも工場が増えるであろう。政府の規制がなされない限り、カスピ海の汚染はさらに増え、また他の地方でも環境問題が大きな問題にならないとも限らない。

(岡崎 正孝)

エジプト◎「ナイルの賜物」の行方

「ヤハウエがこう言われた、次のことであなはわたしにわたしがヤハウエなることを知るであろう。見よ、わたしはわが手にある杖でナイルを打ち、水を血に変わらせる。ナイル川にいる魚は死んで、ナイル川は臭くなり、エジプト人はナイルの水を飲むことができなくなろう。」『出エジプト記』第七章第一一節(関根正雄訳)

冒頭の旧約聖書からの引用句は、ナイル川の増水期の有機質肥料を豊富に含んだ「赤い水」と